

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「あきらめたらアカン」

兵庫県
坂本 ユミ子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「あきらめたらアカン」

坂本 ユミ子(さかもと・ゆみこ)

私の故郷、奈良県大和郡山市は城下町だ。近鉄郡山駅に着く少し前、車窓から苦むした石垣の郡山城跡が見える。駅前の細い路地に入ると豊臣秀吉の弟、秀長が作った城下町「箱本十三町」。魚町、塩町、鍛冶町、豆腐町、柳町、紺屋町など風情のある町名が残っている。私は塩町で生まれ育った。

もう五十年以上も昔、私が小学四年生の時のことだった。その頃、私のクラスではそろばん塾に通うのが流行っていた。私もそろばん塾に行きたかったが、

「そろばん塾に行きたい」

と、母に言えなかった。絶対に無理だと、言う前にあきらめていた。

昭和三十四年、父が交通事故で亡くなった時、母は三十二歳だった。姉は六歳と四歳、私は二歳だった。母は生命保険の外交員で生計を立て、女手一つで三姉妹を育ててくれた。母の給料日前、米櫃が空だったこともある。給食費を払えなくて恥ずかしい思いをしたこともある。我家は常に金欠病だった。母はいつも「ウチは貧乏だから」と言っていたため息をついていた。

「ねえ、ユミちゃん、いつしよにそろばん塾いかにん？」

ある日、クラスで一番仲の良い香代ちゃんが誘ってくれた。香代ちゃんの家は紺屋町にある駄菓子屋さんで、おばあちゃんが店番をしていた。

「行きたいけど、行かれへん。おかあちゃん、きつと『アカン』て、言う。」

「どうして？ ウチは行きたいって、お母ちゃんに言ったら、『それはいいことだ。行きなさい。』って、すぐにOKだったよ。そろばんって、頭よくなるそうだよ」

香代ちゃんは一人っ子で、ご両親は共働きだ。ウチとは経済状態が大違いだ。

「ウチは貧乏やから、月謝を払われへん。そろばん塾なんてムリや。」

正直に話すと、香代ちゃんは力強く言った。

「あきらめたらアカン！ 言ってみないと、わからへん。」

香代ちゃんの言葉に励まされて、私は夕飯を食べている時、思い切って母に、

「お母ちゃん、私、そろばん塾に行きたい！ 香代ちゃんがいつしよ行こうって——」

母は驚いて私を見た。いつしよにご飯を食べていた姉たちもびっくりしていた。それまで私は何か買ってほしいとか、してほしいとか母にねだったことはなかった。姉たちもそうだった。私たちのために一生懸命に働いてくれる母に、そんなことを言うてはいけないと三姉妹の間に暗黙の了解みたいなものがあつた。直ぐにダメと言われるかとびくびくしていたら、

「小学校の近くにあるそろばん塾は月謝が安いよ」

「そろばんって、頭よくなるみたいだよ」

思いがけず、姉たちが後押ししてくれた。姉たちの言葉が効いたのか、母は少し考えてから、「いいよ」と笑顔で言ってくれた。言わずにあきらめなくて、よかった。

放課後、週に二回、私は香代ちゃんと小学校の近くにある、そろばん塾に通うようになった。先生の自宅が教室で、十人ぐらいの小学生が通う小さな塾だった。先生は元中学校の校長先生で、定

年退職後に塾を開いたそうだ。先生は体が大きくスキンヘッドで、厳つい顔をしていた。怖い先生かと思ったが、優しくそろばんを教えてくれた。

十級から始まって、六級までは練習問題の本が終了すると進級したが、五級に進級するには進級試験を受験しなければならぬ。香代ちゃんはずでに試験に合格して、五級に進級していた。私は六級を終了して、初めて進級試験を受けることになった。五級に進級するための試験だから六級の試験を受けなければならないのに、うっかり者の私は誤って申し込み用紙に「五級」と記入してしまった。

試験は日曜日に各地区の中学校で全国一斉に行われる。提出後の訂正は出来ず、五級を受験するしかない。先生の指摘で誤りに気付いたのは試験一週間前だった。五級の練習を全くしていないから、合格出来るわけが無い。母が出してくれた受験料が無駄になる――泣きそうな私に香代ちゃんが言った。

「あきらめたらアカン！」

先生も大きく頷いて、

「あきらめたら終わりだ。まだ一週間あるから、がんばってみよう！」

それから先生は私の塾の無い日も土日も一週間、毎日特訓をしてくれた。香代ちゃんも付き合ってくれた。そのおかげで普通三ヶ月かかる五級の練習問題を全て終了できた。

試験当日、すごく緊張したが、なんとか制限時間内に全問回答することが出来た。試験から二週間後、塾で先生からギリギリの点数で合格したことを知らされた。

「よくがんばった！ みんなもやれば出来るんだ！」

先生は塾生の前で褒めてくれた。みんな拍手してくれた。

「ユミンちゃん、四級へ進級おめでとう！ 抜かれちゃった。くやしい！」

香代ちゃんは言葉とは反対に、全然くやしそうではなかった。

あれから五十年以上の年月が流れた。くじけそうになった時やへこたれそうになった時、いつも香代ちゃんの声が聞こえてきた。

「あきらめたらアカン！」

その言葉に動かされて、私はいろんなことに挑戦してきた。やつてもダメなことの方がずっと多かったけれど、やらずにあきらめなくてよかったと思う。